成人形成期（Arnett，2014）

杉浦祐子

Chapter1　A Longer Road to Adulthood

・アメリカの若者は過去 50 年で少しずつ変化してきた。

1960's の 21 歳		現在の 21 歳
・結婚したり親になったりする ・教育期間を終了して就職する ＝比較的早い段階で重要な決断をする	⇔	・まだ結婚して親にならない ・教育期間が継続している ・転職を繰り返す ＝広く開かれた可能性と自由を経験する 一方で，不確かさにもがく

・このように，現在の 10 代後半～20 代後半は，親の統制下にあった青年期の延長とも，成人期への移行が済んでいる成人期初期とも異なる新しい段階である。この段階を“成人形成期”とする。

“成人形成期”を生み出した変化

・1990's の「Generation X」（1960's 半ば～1970's 半ばに生まれた世代；高い教育を受けながら，就職などの機会が少なく将来への希望を持ちえない）や 2000 年を迎える前の「a generation of “Millennials”」（1981 年以降に生まれ，20C.の世紀末に成人になる世代）はある種の特徴を共有する。

・このような特徴は多くの世代に生じる変化であり，“成人形成期”は世代に関わらず存在する。

・Chapter1 では…“成人形成期”の歴史的背景，特徴，用語，文化的多様性に言及する。

P.2. The Rise of Emerging Adulthood: Four Revolutions

”成人形成期”の歴史的背景

・1960's～1970's に起こった 4 つの変化（①科学技術の変化，②性的な変化，③女性の変化，④若者の変化）によって，結婚したり親になったりすることが遅くなり，10 代後半から 20 代後半にできた空白の時期を“成人形成期”とよぶ。

<u>Figure1.1：結婚したり親になったりする年齢の上昇（20C.半ば～）</u>

①科学技術の変化（p.3～）

・工業技術の革新によって，製造業の多くは機械が担うことが可能になった。

・結果，雇用の中心は 20C.前半の“何かを作る”仕事から，21C.前半には“情報を扱う”仕事へ移行した。

Figure1.2：サービス業，製造業への従事率（1960’s～製造業からサービス業への移行）

・サービス業による経済には高等教育が必要とされるため，70%近い若者が高校卒業後も教育を継続している。
・結果，卒業する 20 代後半まで，成人期のコミットメント（結婚したり親になったりすること）を延期する。

Fgure1.3：大学進学率

②性的な変化（p.4～）
・性的な変化は，科学技術の変化によって生じた。
　Ex. 避妊薬の開発→性的関係を持つために結婚する必要はないという考えが広まった
・結果，10 代後半～20 代の若者がコミットしている恋愛関係において性的関係に寛容になった

③女性の変化（p.5～）

1960 の女性
・結婚することへの社会的なプレッシャーがある
・大学へ進学する女性は少数
・大学進学者の目的は夫探し
　（“M-r-s” degree）
・女性ができる仕事は制限されている
＝夫を見つけ，子供を持つことに焦点づけられていた

⇔

21C.の女性
・20 代前半で結婚することへのプレッシャーはほぼない
・学部生の 57%が女性（特に，法学や経済，医学領域では男性と同等）（アメリカ）

＝多くの選択肢が開かれた

④若者の変化（p.6～）
1960’s～1970’s　成人期を軽視し，若さを称賛する

1950’s の若者
・成人期へと移行し，“落ち着く”ことを切望する
・就職，結婚，家庭など，安定を得ることは成功である（世界大恐慌（1929）や第二次世界大戦の激動の時代に育ったから）

⇔

21C.の若者
・“それは今じゃない”
・結婚，家庭などは成功とはみなされない
→成人期へのコミットメントは安心と安定を提供する一方で，広く開かれた可能性を終わらせる

・“成人形成期”は，高校を卒業してから，結婚，養育，就職などの成人期を構成するコミットメントを形成し始めるまでの時期=18 歳～25 歳/29 歳
・18 歳～25 歳は従来の年齢範囲だが，この時期に安定して成人期へ移行する人は少ない。
・国際的な平均結婚年齢が約 30 歳であることから，18 歳～29 歳も“成人形成期”の年齢範囲とすることができる。
・19C.～20C.前半も（特に男性の）結婚年齢は比較的高かったが，彼らは経済的理由や性役割のために，10 代後半～20 代で成人期の責任を果たすことを求められた。そのため，その時期を探求に使えなかった。
・現在では，10 代後半～20 代の間に長期のモラトリアムが認められている。貧困などの社会的状況によって差はあるが，全体として“成人形成期”は自由であり，それぞれのペースで成人が果たすべき責任を果たすようになっていく。

P.8. What Is Emerging Adulthood?
“成人形成期”の特徴
・教育の長期化，結婚したり親になったりすることの遅延，安定した職業への就職の遅延などによって生じた，青年期と成人期初期の間の新たな段階が“成人形成期”である。
・“成人形成期”は世界中で確認できる現象であるが，“成人形成期”の間に経験することは，民族，文化，社会経済的文脈によって多様である。
・つまり，“成人形成期”は，ある特徴を持った，しかしその時期を通して多様な経路がある段階とみなすのが最も良い。
・本研究は，18～29 歳の普遍的な特徴ではなく，アメリカ社会の文脈で実施された研究によって，アメリカの“成人形成期”の特徴を示している。
・アメリカにおいて“成人形成期”を特徴づける 5 つの特徴（①アイデンティティ探求，②不安定性，③自己焦点化，④青年でも成人でもないという感覚，⑤可能性/楽観性）は，他の段階でも経験するが，より“成人形成期”に顕著である。

①アイデンティティ探求（p.9～）
・“成人形成期”を最も特徴づけるもの
・10 代後半～20 代半ばは，親から自立し，かつ，成人が果たす役割にはコミットしていない時期なので，アイデンティティ探求の良い機会である。
・10 代後半～20 代を通してアイデンティティ発達が続くため，青年期が 10～18 歳，“成人形成期”が 18～25 歳ならば，“成人形成期”はアイデンティティ探求の時期に当たる。
←Erikson「産業化社会に特有の長期化した青年期」と「産業化社会の青年に与えられた心理的モラトリアム」に言及
・恋愛関係領域，職業領域ともに，アイデンティティ形成は青年期にはじまり，“成人形成期”に強くなる。

恋愛関係の領域で

青年期		“成人形成期”
・不確かで一時的	⇔	・よりアイデンティティに焦点づけられる ・様々な経験をする

職業領域でも同様に

青年期		“成人形成期”
・アルバイト ＝自分の楽しみのためにお金を得る手段	⇔	・仕事の経験は，成人期に就く職業の準備 ・教育，職業の可能性を探る ＝様々な職業や大学の専攻を試しながら，自分自身を知る

しかし，その変化はゆっくりと起こる。

今日の“成人形成期”に共通するのは，YOLO（You Only Live Once；一度きりの人生を生きる）

・様々なプログラム（Teach for America，Ameri Corps，Peace Corps など）への参加や一人旅も，経験の幅を広げ，アイデンティティ探求の一部となる。

②不安定性（p.11～）

・“Emerging Adults”はアイデンティティを探求するが，その結果，それまで持っていた将来計画について非常に多くの見直しを必要とする。

　・大学入学後，選択した専攻が思っていたほどおもしろくないと気づく

　・恋人と一緒に過ごす将来を考えるが，そんな将来は来ないと気づく　など

・この見直しを通じて，“Emerging Adults”は自分自身を知り，将来どうありたいかを明確にしていく。

・“成人形成期”の不安定性を示すもっともよい例は転居の多さである。

・転居率は 18 歳以降に急上昇し，20 代半ばにピークを迎える。その後，再び急降下する。

・これらの転居は，恋愛関係領域や職業領域におけるアイデンティティ探求のために行われる。

　←転居が多い理由：大学進学，大学中退，ルームメートとの関係，恋人との関係，就職

Figure1.4：転居率

③自己焦点化（p.13～）

・“成人形成期”ほど自己に焦点づけられる時期はない。

・18～19 歳で家を離れることによって，日常生活がより自己に焦点づけられる。また，他者は回答を持ち合わせていない自分自身に関することも自分で決定するようになる。

⇔児童期や青年期も自己に焦点づけられるものの，この時期には親や教師が回答を示してくれる。

・“成人形成期”の自己焦点化は利己的ではなく，一般的で健康的なことである。自己焦点化によって，他者との関係にコミットする前に必要となる自立した人間となることが目的である。

④青年でも成人でもないという感覚（p.14～）

・“成人形成期”におけるアイデンティティ探求と不安定性が，青年期でも成人期初期でもない時期だという中間の感覚を生じさせる。

・この時期は，青年期のように制限もないが，成人期の責任もまだない状態である。

・「もう大人か？」という質問への回答として，ある質問には「Yes」，他のある質問には「No」

（Ex.illian（25 歳）の回答）

・自分が大人か否かを判断する基準のうち，Top3 は，①自分自身の責任を引き受ける，②自分自身で決断する，③経済的に自立する，であり，すべての基準が一度に満たされるのではなく，だんだんと移行していく。

→“Emerging Adults”は，18～19 歳から大人だと感じ始めるが，20 代半ば～20 代後半までは完全に大人だとは思わない。そのため，青年でも成人でもないという中間の感覚を持つ。

⑤可能性/楽観性（p.15～）

・“成人形成期”には様々な将来の可能性があるため，この時期には大きな希望と期待を持つ。この時期には，満足できる職業や恋愛関係，結婚などの将来に目を向けるが，退屈な仕事や離婚などを経験する可能性は想像もしない。

・家を離れているが，まだ新たな関係にコミットしていない“成人形成期”は，人生の方向性を大きく変える可能性がある時期でもある。

・家庭や家族間に問題を抱えている子どもや青年は，それらの問題が自分自身の問題へ反映されるが，家を離れることで，自分がどうありたいのか，どう生きたいのかを自分自身で決定し，自分の人生を変え始める。

→Chapter12

・家庭や家族間に問題を抱えていない“Emerging Adults”にとっても，家を離れることは，自分がどうありたいのか，どう生きたいのかを自分自身で決定し，自分の人生を変え始める機会となる。

・家庭や家族の背景に関わらず，“Emerging Adults”は家族から影響を受けているが，“成人形成期”は他の段階よりも，どのように生きるかという生き方の選択の幅が広いため，変化の可能性を示す。

信太寿理

p17. Research on the Five Features

・数十年前に自分が提案した 5 つの特徴は，研究が続けられているのか。Alan Reifman がこの 5 つの特徴の測定を発展させ，the Inventory of Dimensions of Emerging Adulthood (IDEA　成人形成期次元尺度)を５つの研究で試している。

・それらの研究で，20 代の参加者がそれよりも若いまたは年上のグループよりも５つの特徴が高く表れた。５つの特徴とは，identity explorations（アイデンティティ探求），negativity/instability（消極性／不安定性）, self-focus（自己焦点化）, feeling in-between（中間の感情）, and experimentation/possibilities（実験／可能性）である。

・Table1.1 に示すように，5 つの特徴の全てが 18-29 歳の大部分によって支持されていた。

Table1.1 成人形成期に関する５つの特徴（パーセントは同意したアメリカ国民の数字）

・Figure1.5 にあるように，18-29 歳の 45%が「成人期に到達したと思いますか」という質問について，はいか，はいまたはいいえで答えている。

Figure1.5 「中間」の感情：年齢による変化

・その他の機能については，年齢による違いがみられた。18-25 歳は，26-29 歳よりも identity explorations, instability, self-focus についてより同意する傾向があった。つまり，アメリカ社会における成人形成期とは，18-25 歳であることを示唆している。

・しかしながら， 18-25 歳か，18-29 歳かについても，その質問やトピックによって適切な年齢範囲として捉えることができるのかも知れない。

・5 つの特徴は，性別や民族，社会経済的地位（SES）で変わるのだろうか。

・ Clark University の調査結果では，性別や民族によって，いくつか目立った違いがみられた。SES においてもミドルクラスのみが当てはまる理論なのではないかという批判がでてきた。

・2013 年と 2014 年に，Clark University の調査結果では 5 つの特徴について，18-29 歳は，30〜65 歳よりも一致の可能性が高かった。

Figure1.6 年齢集団による５つの特徴

・私は，ただアメリカの成人形成期にあるものの大部分が 5 つの特徴にあてはまり，より年上の 18-29 歳がより５つの特徴を支持するであろう，ということを強調している。

・多様なアメリカの社会内のすべてのグループに，民族的に，経済的にあてはまるわけではない。例：北ヨーロッパ。南ヨーロッパは結婚する 30 歳くらいまで実家で過ごすが，北ヨーロッパは 18-19 歳頃には家を出るため，北ヨーロッパのほうが成人形成期において不安定性が増す。

・成人形成期のフィールドはまだ新しいため，先進国と開発途上国ではパスには多様性があるだろう。

p20. Who Needs Emerging Adulthood?

・なぜ，成人形成期が必要なのか。10 代後半から 20 代中頃まで，「青年期後期」と呼ぶのはなぜなのか。「若い成人期」と呼ぶ方がいいのではないか。このような点について考えた。

Why Emerging Adulthood Is Not "Late Adolescence"

・1992 年に初めて生涯を通した人間の発達について，大学生に教えたのだが，青年期は分離の時期であり，社会科学では「青年期後期」とされていることを話した。

・社会科学者は，完成教育，結婚，親の立場などの離散的な変遷について成人期を定義した。彼らは学生であり，彼らが教育を終えておらず，ほとんどが結婚しておらず，親になっていたものはわずかであることははっきりしていた。彼らは憤りを感じた。その時，私は驚き，彼らの反対の声に当惑した。「青年期後期」は，大学生または 10 代後半から 20 代の期間にいる誰かのための完全に不十分な用語であり，私は成人形成期と呼んでいる。

・事実，すべての青年（10-18 歳）は，一人暮らしか両親と家に住んでいる。対照的に，多くの成人形成期の人々は彼らの両親の家から出てゆくので，彼らが住んでいる状況は極めて多様である。

・身体的変化，法律，権利など，さまざまな方法において，成人形成期にある人々は青年とは違う。結果として「青年期後期」が，彼らを説明するためには不十分な用語である。

p21. Why Emerging Adulthood Is Not "Young Adulthood"

・もし「青年期後期」ではなく，　「若い成人期」ならどうだろうか？「若い成人期」では不十分な多くの理由がある。それは，成人期に達したことを暗示していることである。

・私が成人形成期と呼んでいる期間は，30 代とは大きく区別することができる。ほとんどの成人形成期にある人々のほとんどは，彼らが成人期に達したと思っていないが，30 代ほとんどの人は、達したと感じている。

・ほとんどの成人形成期の人々は，教育や訓練を探している過程であり，職務経験は長期の職業のための用意である。けれども、30 代のほとんどの人々は、より安定していた職業に落ち着いている。

ほとんどの成人形成期にある人々はまだ結婚していないが，30 代のほとんどの人々は結婚している。ほとんどの成人形成期にある人々はまだ子どもがいないけれども，30 代のほとんどの人々は少なくとも 1 人の子どもがいる。

・このように，成人形成期は，10 代後半から 20 代を通じて若い人々に言及するためには，若い成人期より用語として優れている。

p22- Why Emerging Adulthood Is Not "the Transition to Adulthood"

・別の可能性は，10 代後半から 20 代を通した期間を「成人期への移行」と呼ぶことである。この期間に，若者のほとんどが、愛と仕事の中で安定した成人の役割への変化という点で，成人期に移行をすることは真実である。しかし，「成人期への移行」もまた、この期間の用語としては不十分であることが示され

ている。

・成人期への移行についての研究は喜ばしく，潜在的に興味深いけれども，それは成人形成期についての研究と同じではない。「成人期への移行」についての別の問題は，青年期と若い成人期の間の期間が短く，人生の２つの長く，より著しい期間であり，それゆえに移行というよりもそれ自身の人生の段階であると暗示していることである。

・5,60 年前は 20 代前半までに結婚し，子どもをもつといった人が多く，適切であったかもしれないが，現代社会ではそうではないため「成人期への移行」といった考え方はもう意味をなさない。

p24- Why Emerging Adulthood Is Not "Youth"

・言及されなければならない他の問題として，「youth 若者」という用語がある。これは 20 世紀後半に，社会科学において最も広く使われた用語であった。過去に使われた用語のどれも、若い人々の間で今日彼らが 10 代後半から 20 代を通じて起こるものを説明するのに十分ではない。この年代の新しい期間と新しい概念が必要であり，私は、成人形成期を提案した。

p24- The Cultural Context of Emerging Adulthood

・成人形成期は，人間発達の一般的な部分ではなく，近年およびいくつかの文化の中でのみ，一定の条件のもとで存在する人生の段階である。

・4 つの革命は，20 代後半及びそれ以降の成人形成期において，結婚年齢や親になる年齢の上昇を引き起こした。そのことにより，他の目的に 10 代後半や 20 代のほとんどを費やすことができるようになった。

・Table1.2 は、開発途上国と先進国の女性の結婚の平均年齢を示している。（男性の結婚年齢の平均は一般に，女性に比べて約 2 年上である。）

Figure1.2 いくつかの国での女性の結婚年齢の平均

・社会経済的地位と人生の機会の変化は，どのように若い人が成人形成期を経験するのかということも決定する。

・例：16 歳で未婚のまま子どもをもうけた若い女性は，政府に依存し，給与の低い仕事をするため，アイデンティティを探索する機会は少ない。

・しかしながら，民族性よりも社会的なクラスが重要になるかもしれない。

・先進国のとても若い人々は，成人形成期を経験するけれども，彼らはそれを，文化や社会的なクラス，ジェンダー，パーソナリティ，個々のライフイベント，および他の状況に依存した多様な方法で経験する。

・これはキーポイントである：成人形成期は、少なくとも数年の間どこでも，存在するといわれているかもしれない。高校を終えた時と，愛や仕事において安定した役割に入る時の数年間で。

・この章において示された 5 つの特徴は，ほとんどのアメリカの成人形成期にいる成人にあてはまるけれども，他の特徴は他の文化的な文脈にあてはまるかもしれない。それは，一般的で、均一な成人形成

期ではないが，文化的，経済的，および個人的な文脈によって多くの成人形成期にいる人は変化する。

・Table1.3 は，どのようにグローバリゼーションが、第 3 の教育（すなわち，高校を越える教育または訓練）をより一般的な世界共通の経験となることによって，若者の人生に影響を与えるのかという例が示されている。1980 年から 2010 年まで、第 3 の教育に登録された開発途上国の割合の若者が急に声をあげた。結婚年齢と親になる年齢の平均値が，これらの国でも上昇した。

Table1.3 選択された開発途上国についての，1980 年から現在までの第 3 の登録の変化

・これら教育力の上昇は，経済発展を反映する。経済発展は結婚年齢と親になる年齢の上昇を引き起こす。社会がより豊富になるにつれて，彼らはより，成人形成期の拡張されたモラトリアムの機会を若い人々に与えそうである。

The Plan of This Book

・成人形成期の挑戦や，不確かさや，可能性が，人生の魅力的で，出来事の多い時間にする。以下の章での私の意図は，アメリカ社会での成人形成期の者であることについて，広い肖像を提供することである。

・2 章では，成人形成期にある 4 人の詳細な人生を見てゆく。個々の人生において，この最初の章において説明されたテーマがいかに反映されるかが理解できるだろう。章の素材は，主に 1990 年代の間に Missouri, San Francisco, Los Angeles, and New Orleans で私および私の研究アシスタントが実施した 300 回を超える詳細な構造化されたインタビューに基づいている（今後「私のオリジナルの研究」とする）。

Chpter2

What Is It Like to Be an Emerging Adult?

・Douglas Coupland の 1991 年の小説である，Generation X が 20 代の若者の人生に起こった事実として，広範囲に及ぶことになった。この小説では，20 代を通じて共に過ごす，Andy, Claire,そして Dag の人生を描いている。

・彼らの誰も，楽しい仕事には就けていないが，無限にストレスを感じるような仕事には，例え給与が高くても就こうとはしない。また，愛情についても，結婚に近いものはいないが，Andy は「少なくとも，人生を一人で過ごしたくはないということを認識はしている」と述べている。これらの，成人形成期の感情は，章のタイトルにもしている（30 歳で死に，70 歳で埋められる）。

・この本の目的は，Coupland の本のようなノンフィクションではなくフィクションである。成人形成期にある若者がどのような人生を送るのかというパターンについて説明したい。

・この章では，成人形成期にある４人の人生について書いている。それぞれ経験豊かであり，２人は男性・２人は女性であり，２人は白人で・２人は少数民族に属している。２人は大学を卒業しており，２人はしていない，といったように，アメリカの様々な部分で成長した４人である。

Rosa: "Choking Life for All It's Got"

・ローザに初めてあったのは，サンフランシスコ大学近くのコーヒーショップで，入って来た時にすぐ分かった。彼女は，24 歳で，母親が中国人で父親がメキシコ人であった。彼女はインターネットソフトウェアの会社に勤めており，会った時にはカジュアルな服装をしていた。

<u>仕事</u>

・彼女は小さな会社で，編集を含んだ様々なスキルが必要とされる仕事をしている。彼女はそういった多様な仕事について好ましく思っている。なぜなら彼女の可能性を高めるチャンスになるからである。編集の仕事も始めたばかりだが，マーケティングの仕事もやってみたいと思っている。なぜなら，「自分がやりたいことが何かを知りたいから。」

・この会社に努めることは，大学を卒業した２年前に考えていた訳ではなかった。本当は教育の世界に入りたかったので，大学卒業後に極めて低所得の学校で行われていた放課後のプログラムに参加した。しかし，学校の現場で見たのは，１日中食事がとれず，親もダメで，祖父母の家などに行っているような子ども達だった。彼らをみて，ローザは幻滅してしまった。

・結局教育の仕事は辞めた。この仕事は一生やって行く仕事ではなかったのだと思った。「パン屋さんを開こうとしているところでもあり，これが私の本当にやりたいことだ」という一方で，他の可能性についても考えている。コンピューターを前にすると，書くことが好きだった自分を思い出すこともできる。このように，成人形成期にある間に，一時的な探索活動をすることが幸せなようである。

<u>恋愛</u>

・彼女は仕事よりも愛情に安定を見出だしている。彼女はこの３年で，恋人であるマークと結婚するであろうと考えている。彼女は結婚する前に，自己を焦点化することで自らのアイデンティティについて明確化させることを必要としているように感じる。

・この決断力のない，結婚に対する様子は，多くの成人形成期にある者がそうであるように，中間にいる感覚を持っている。

<u>家族</u>

・彼女の両親から独立することは，大きな問題ではなかった。

・彼女は両親とうまくやっていたけれども，いつも順調なわけではなかった。父親は母親が長時間仕事をすることに不満をもち，母親は父親の飲酒に不満を持っていた。今はうまくやっているが，それは彼女にとって理想とする結婚ではなかった。

・また，彼女の両親の間にあった葛藤が，そのまま疑惑や敵意となって表れた。彼女の兄弟はアジア人に見られることで子ども達にからかわれた。彼女は民族性が自分に表れていると思ったが，それは同一ではなく，メキシコの人から敵意をもたれていると感じていた。「私はメキシコ人だけど，そのようには見えない！」

・そして，彼女の中国の部分に傾倒してゆくのだが，彼女は今成人形成期にあるので，もう一方のメキシコの側面を失ってしまうことに対して，悪いと思っており，父親に対して公平ではないと思っている。

宗教

・ローザの中に残っている父の部分といえば，私がカトリック教徒であることと，メキシコ料理が作れるということくらいだと感じている。

・でも彼女はカトリック教について，好ましく思っていない。自分の子どもはカトリック教徒にしないし，カトリック教は現代社会に合っていると思わない。母親は仏教なので，仏教の影響も受けていると感じている。

・未来には，ローザはたくさんの夢がある。マークと結婚し２人の子どもをもうけている。母親とパン屋を開いている。もし経済的に豊かなのであれば，生涯学びたい，と思っている。「私は読んだり，書いたりすることが大好きだから」

丹羽智美

Steve: "Who Knows What's Going to Happen?"

23 歳。父親の仕事の都合（請負エンジニア）でこれまで様々なところに住んできた。引っ越しを重ねるのが嫌で，いつか家を出てどこかに根を下ろしたいと思っていたが，成人形成期の間転々と住まいを変えていった。今のところミズーリ州に住んでいる。ミズーリ州は子どものときにしばらく住んでいて，ミズーリ大学に行くために戻ってきた。しかし，数セメスター後にバーンアウトで学校を辞めた。今は地元レストランでウエイターをやっている。給料には満足している。

仕事

大学では美術を専攻していた。お金を稼ぐため，今でもスケッチや肖像画を描いている。美術的才能からうまくキャリアを築けたかもしれないことには懐疑的である。趣味程度に終わると思っている。

どのように仕事への道筋をつけるのかはわかっていない。父親がエンジニアであること，数学が得意であることから，エンジニアになるだろうと思っている。しかし，その話題の数分後にこれから 10 年の間にすることを尋ねると，技術職に関してはなにも語られなかった。コロラドに住んでレストランを所有したいこと，8 年間外食ビジネスに従事していたこともあり，詳しいため，経営者の方がいいかもしれないことが語られた。ただ，外食ビジネスに従事と言っても，調理やウエイター，バーテンダーであり，これらを入れないと夢の実現のためにやっていることはない。

恋愛

恋愛に関して，勤務先のウエイトレスであった Sandy と 2 か月間付き合った。関係はうまくいっていて，2 人は同棲したいと思っていた。しかし，彼女の両親の反対によってためらっている。彼の同棲の理由は結婚を視野にいれたものではなく，費用を折半できるというものだった。

彼は結婚を急いでいない。そのプレッシャーも感じていない。結婚相手に求める特性もよくわかっていない。相手を見つけたときにわかるだろうと述べている。

宗教

信仰に関しても不安定である。成長過程において両親が信仰心を持たせようとしたことはない。両親は信仰心を持とうが持つまいがどちらでも支持すると言っていた。現在，彼は創造主を信仰している。また，輪廻についても信じている。しかし，話を聞いていくと，それらが証明されていないことなどを述べ，信心はないことがわかる。

以上のことから，彼は成人期に到達していないことがわかる。1 つは，人生の行先を決めるために大人として必要とされることを受け入れられていないことである。2 つ目は，大人の摂取量と彼が考えている量よりもアルコール摂取量が多いことである。かつてよりは減っている。それでも大人ではないとみなすのに十分な飲酒を続けている。

両親も彼を大人になったとは見ていない。ウエイターとは違った“本当の職”に就いた時がその時だと述べている。しかし，親子関係は対等な関係に変わってきており，お互いオープンに開示するようになったことを，大人のレベルだと述べている。

両親は専門職としても個人の人生としてもうまくいっている。父親はエンジニア，母親は子どもが小さなときは子育てに専念し，今はアンティークショップを持っている。彼らの結婚生活も円満であり，子どもとの親子関係もよかったようだ。両親の良好な人生とは反対に彼は今不安定な人生であるにもかかわらず，親よりもいい人生を持てると信じている。その理由は，彼には成人形成期に異なった可能性へ挑戦できる自由がある一方，親にはなかったことである。

大人の生活とは，満足した給料のいい仕事，幸せな結婚，2 人の子ども，愛する地での居住だという。しかし，今，彼は喜んで放浪している。前途有望な機会を逃さないためであり，そのために賃貸契約は月ごとにしている。

Charles: "I'm Highly Portable"

27 歳のアフリカ系アメリカ人。The Cat House というアカペラグループの 1 人。芸術家かシンガーソングライターのように見える。1 年広告代理店に勤めているが，彼は臨時雇いとしてみなしており，バンドが成功したらいつでも離職できると思っている。今，CD のレコーディングをしており，メンバーは皆それが終わり宣伝のためのツアーに出かけるまで臨時の仕事をしている。彼はクリーブランドの裕福な郊外であるシェーカーハイツで育った。両親は弁護士で，母親は労働法，父親は人身侵害を扱う。両親との関係は昔から良好である。

仕事

彼はプリンストン大学の心理学専攻を卒業している。心理学者か弁護士になることを真剣に考えたが，選択しなかったことで後悔したくないと思い，音楽を選んだ。自分を拘束するようなものがなく，身軽であるため，自分で自分を支えられる限りはしたいことをすると述べている。将来，音楽に加え，音楽以外の創作表現の道も追及するとみている。やりたいことをして身を立てたいと述べており，満足した人生を持てると予想している。

以上を見ると，職業として音楽を追及する選択をしているが，それは拡散している。彼は 10 年後，音楽に関わっていると思っているが，どのようにかは言えなかった。彼は十分な可能性を持っているが，将来何を実現するのかは予測するのが難しい。

人種

人種問題については幼いことから傷つけられてきた。1 年生の初日に白人の子どもから鼻を殴られて血まみれになったので，次の日にやり返した。次の年の夏休みのスポーツキャンプにおいて，子どもが彼に「ニガー」と言った。両親に意味を尋ねると，もし再度その言葉を言ったらなぐりなさいと父親が言った。そのため，2,3 日後のテニスクラスで彼が再び「ニガー」と言ったので，ラケットで殴った。すると二度と言わなくなった。

青年期においては，多くのアフリカ系アメリカ人男性で共有された出来事があった。違反していようがいまいが，黒人の若者がいい車を夜間運転していると，警察官にわきに止めるように言われる。このような経験をしていても，彼は白人と良好な関係を築いてきた。高校，大学と黒人，アジア系アメリカ人だけでなく，白人の友人も多かった。

成人形成期では，アフリカ系アメリカ人であることがアイデンティティの一部となっている。彼は，アメリカ社会の中でアフリカ系アメリカ人が好機を得ることは制限されていると思っている。両親は彼が幼い時から，黒人として生きていく上で，パートナーを得ることの 2 倍仕事を得ることが大変だと話していた。それでも，彼の才能と経歴の強みは，彼のやることすべてに良い結果をもたらすと信じている。

高等教育を受けた両親は，彼に学術的に優れていることを推奨した。両親は彼が有能であることを認めており，彼の成績の良さよりも学ぶ内容を重視していた。

友人との関係は良好だが，彼が白人の多い上級クラスに入り，白人の友人ができることに対して，うぬぼれているという黒人の子どもがいることが不安だった。プリンストン大学で彼が受け入れられている時も，黒人の知り合いの 1 人がそれを歓迎していない様子だった。しかし，それを受け流してきた。

恋愛

恋愛についても同様である。3 年付き合っている恋人がいる。お互い音楽好きである。2 人とも結婚を実現可能性のあるものとしてとらえていない。

宗教

信仰は定まっておらず，形成途中である。幼い時から両親と監督教会に通っていたが，青年期から日曜学校にあきてきた。教会は比較的リベラルで教義からの逸脱に寛容であったが，それに不満を持っている。

彼が信じているのは神である。しかし，こういう神は信じないという特徴は明確だが，反対は明確でない。仏教に魅力を感じており，特に輪廻の魅力を述べるが，仏教徒ではないと彼は言う。

大学卒業後，ベイエリアに引っ越して以来，彼は成人期に到達していると感じている。頼る人もおらず，1 人で様々なことをすることが彼を大人にしたと述べている。しかし，彼の人生はアイデンティティ探求の状態であり，不安定である。

友人の多くが成人形成期から移行していったが，彼はアイデンティティ探求に傾倒しており，不安定であることにも大目に見ている。

Angela: "I Want to Get Life in Order"

教育

21 歳。ミシガン州で園芸セラピーを専攻して 2 年過ごした後，ミズーリ州に来た。大学に行くことが，成人期に到達したという認識を持たせる重要な出来事となった。それが，親から離れ，独立することを意味していたからだ。学士を取ることを望んだが，専攻を普通の園芸に替えたくなり，それを大学に止められたことで大学を辞めた。そのため，園芸の仕事をしながら，地元の大学で学士を取ることにした。

高校のときから園芸を職業にしたいと思っており，授業も受講した。先生に進められてミシガン州に行った。卒業しなかったのには落胆したが，友達の多くも卒業せず辞めたのを知っているので，自分 1 人だけではないと思っている。

ミシガン州で過ごした最後の方は，授業とフルタイムの仕事で疲れ切っていた。今は学校を卒業し，仕事を通して園芸についてたくさん学んでいる。

ミシガンで 2 年間園芸を学んだことはよかったと彼女は思っているが，学費を借金している。それを返済できるかについて不安に思っている。両親は裕福であるが，彼女が大学教育を受けるに当たり，金銭的に支援しようとはしなかった。その理由について問われても，彼女はわからないと答える。

家族

彼女の両親は彼女が 4 歳の時に離婚し，2 年後母親が再婚した。そのため，母親，継父，義兄と義妹のいる家庭で育った。母親は医療技術者，継父は天文学の大学教授である。母親との関係はよかったが，継父との関係はよくなかった。継父の飲酒に関して，父母でいさかいが起こっており，今も継続している。子どもが成長する環境としてはよくなかったと述べている。

実父は南カロライナ州の大学の医学教授である。離婚後もそこにとどまっている。彼女はそれからほとんど会っていない。7 年間は全く会っていないが，その理由は時間がなかったからというものだった。

しかし，電話で月 2 回話をしている。

恋愛

恋愛に関しては遅いスタートであった。それは彼女の身長が高すぎて男性がおびえ，男性が声をかけたがらなかったからであると述べている。未だ身長に対して固執しているが，成人形成期になってその見方も変わってきた。

ミシガン州で 2 年間男性と付き合った。スポーツやアウトドア好きで共通点があり，うまくいっていた。しかし，彼が卒業後すぐに破局した。彼が結婚を望んだが，彼女はそれを怖がった。26 歳くらいまでは結婚しないと述べている。それは，男性に頼りたくない，自分の人生や仕事や経済力をもちたいからであるという。

去年，ミズーリ州に戻ってすぐに今の恋人と会った。彼は飲酒量が多かった。彼は学士を取っておらず，建築業をしていた。彼は 29 歳で，離婚しており，息子がいる。彼女は彼が自己制御できていない点で父親として不充分だと思っている。彼は彼の子どもが彼女を尋ねた時に子守をしてほしいと思っているが，彼女はそれに腹を立てている。

そのような将来性のない関係を持っていることに彼女自身も不思議に思っている。去年はどうかしていたと述べている。しかし，彼女らは最近一緒に住んでいる。それは，親が彼女を追い払うので家に住みたくないからである。経済的に苦しくて引っ越しできない人は実家に住んでいるが，ほとんどアパートを持っているので，彼女もそうしようと考えているそうだが，家賃が上がったという理由で，後回しになっている。

彼女はアウトドアの趣味を共有できる人と結婚したいと思っている。また，彼女は子どもを持つことを楽しみにしている。結婚は 20 代後半まで考えていない。それは，両親のようにならないためである。

10 年後，楽しくできる職業につき，愛する人と結婚し，子どもを持つという幸せな生活があると信じているが，現状を見ると実現には程遠い。

Conclusion: Themes and Variations in Emerging Adulthood

4 名とも恋愛と仕事でアイデンティティ探求をしていた。「何が最も楽しいのか。何が自分にとってベストなのか。どうやってそれと得られる選択とを合わせるのか」の問いに答えを出している途中にある。また，「誰が人生のパートナーとなるべきか」の問いについて考えている。

成人形成期においてアイデンティティ探求と不安定さは連携している。彼らは 10 年後 20 年後より，近い未来の方が予測できていない。しかし，それが彼らを悩ませてはいなかった。探究の一部として受け入れていた。

アイデンティティ探求の集中は成人形成期に自己焦点化の時間を作る。徐々に他者にコミットすることを望むが，成人形成期では目標や自己成長に焦点づけることを求める。

そして，探究の期間にいるという意識が，もはや青年ではなく，成人でもないという，中間にいる意

識を作る。

このように，成人形成期では，可能性から現実へ移行する時に探究，不安定さ，自己成長への焦点化が特徴としてみられる。確かに，彼らの人生には多くの探究と不安定さがあるが，彼らは将来望むものを得られると信じている。